技術生活より

疑問

(二) 片隅の世界

今の大きな社會の片隅にでも隨分手廣な間口を構えて我等技術家の世界がある。「片隅に」とは甚だ以て御互に輕んずるに似た云ひ振りてはあるが、まさか「眞中に」とも云ひ切れぬ

ではあるまいか。

それに正直な所、此世界はたゞ何となく地味で、單調で、窮窟げなるものである。其内に住む技術家各個の氣分も亦自づと陰氣な偏狹な、そして弱々しく氣後れがちなものである。宛然曇りながらに暮行く空の重苦しきが中に默々として蠢動めく羊の群れを思はしむるがやうな物寂しさである。不景氣なゆとりの無い「片隅」と云つた風の調子が何となく其全體に漲つて居るのである。

とは云へ、此の「片隅」の世界から起つて、敢て全社會を震撼せしむるに足るべき大波瀾を捲起したり大革新を成就し得た

る痛快な事例はいくらもてある、否寧ろ十九世紀末から今日へかけての目覺しき社會上の大事件とし云へば、それは何時でも其震源が主として此「片隅」に存したことを首肯せしむるに足る。即ち此意味からすれば我「片隅」は實に「恐るべき片隅」であり、同時に「名譽の片隅」である。否或は「片隅」などゝの遠慮を捨てゝ寧ろ堂々と社會の眞只中に光榮ある立場を要求すべきが當然である。

が、それにしても廣き社會は一般に然かく正當なる我等の立場を理解しては居らぬ、然かく恐るべき威力の持主として我等を畏敬しては居らぬ、否これを畏敬しこれを承認するよ

り以前に、寧ろその御し易く與し易き所以のものを看取し去つて、態よくこれを彼の「片隅」の小天地に押片附けんと強ゐつゝある。同時に又、自ら進んで社會の表に晴れがましく立振舞ふべく餘りに內氣に餘り引込思案な我技術家自身もまた、我から氣樂な「片隅」の小天地に滿足し切つて、唯々默々、敢て其の正當の權威と立場とを堂々と社會の表に爭ふ野心が無い。

即ち此の如くにして、名實共に具備した片隅の世界が何時とはなしに出來上つたものゝ、扨それが果して事の宜しきを得た次第なのであらうか、少くとも我等技術家の運命はそれで滿足すべきなのであらうか、今の世に活き甲斐ある生命を活きんが爲めに我等技術家は唯無自覺に斯樣の境涯に果して晏如たり得るのであらうが。

思へ、今の技術界に屬する人々が大凡そ何れ程あらう、年々此大旆を目懸けて新に馳せ參ずる人達がこれ又何程ぞ。先輩後進相並んで儀容堂々たる我技術の世界は、其數に於て、先づ頗る豪勢な物賴母しげなるものではないか。

況んや此人達の手によりてこそ、世界の交通組織乃至系統を一變するに足るべき大工事が施されるのではないか、昨日までの文明の形式を頓に一新し去る程の大發見大發明が成就するのではないか。濛々たる黑煙を渦卷く高い煙突の下

には我等ならでは取扱ふことの出來ざる複雜な機械が目にも止まらぬ早さで旋つて居る、振仰ぐ大建築には眼覺むる許りの技巧の冴えが隅から隅まで心地よく照り輝いて居る、見て見へぬ地下何百尺の底にまで隱れたる我等の苦心が縱橫に這ひ擴がつて、社會の生命の糧、福利の根が培はれ守られ又は獲られつゝある。其他これを引括めて、凡そ人類の利便に役立つ新たなる自然力の捕捉操縱制御の道は皆悉く我等の力を藉りて初めて汎ねき社會のものとなるのではないか。

然るにも拘らず、只管其恩惠に隨喜し其利澤を追ふて狂奔する一般社會の前に、此最も優勢なるべき筈の技術家が、未だ其至當の尊敬をも贏ち得ず、否これを要求するだけの發言をだも躊躇し、自ら忸怩として與へられたる儘の乏しき待遇を甘受し、唯々として其偏狹なる「片隅」の世界に回避し去るのは、そも何の故たるであらう。

疑はねばならぬ、考へねばならぬ。それは決して屑々たる技術上の問題ではない、否寧ろ根本的に技術其ものに對する懷疑であり、技術家其ものに對する不安である。餘所の世間の取沙汰ではない、打てば響く我等各自の問題である。

(三) 曰く非常識

「我等の必要とするは常識の人である。事の大局を見ずして細故(デテール)に泥み、偏狹なる智見に拘はつて、却て達觀の能を缺く、彼の技術家のことでは無い」。

此思ひ切たる云ひ分は、今より數年前米國紐育市の公共事業委員會に缺員を生じたる折、ブルックリン技術家倶樂部が卒先して其補缺には宜敢技術家を擧ぐべしと決議し、紐育市技術同盟會も亦之れを援けて奔走したりし際に、該委員會に殘れる委員連から發せられたる聲明であつた。彼等は尙もつづけて曰く。

「我等委員の必要とするは、事件の眞相を上から下へ、下から上へと視徹し得べき人達である、市と公共との關係を明瞭に理解し得べき人達である、市と公共との關係を巧に調和し協定し得べき人達である。渠等は能く我紐育市の問題を辨別して如何に是れを處理すべきかを知り、何處に適法が初まり何處に不法が始まるかを洞見せねばならぬ。而して斯かる位置には技術家は全然不向きである。何となれば其細故にのみ偏せる訓練は渠等を大ならしめず」

て却つて小ならしめたが爲めである。我委員會の審理を要する問題には無論技術上のものが多い、が、縱し其道には疎くとも、我等に必要なるは寧ろ識見と、理解と、常識と、然り、只それ丈けである」と

斯くて此事件が何う片附いたかは知らぬが、恐らく技術家側の捷利とまでには立到らなかつたのであらう。それは兎も角として、我等技術家が一般社會の眼に、頗る無見識な、不理解な、非常識なものとして映じつゝある事實の一端が、此の場合にも亦甚だ露骨に示されたるではないか。相當に技術家の估券の苦蒸したる海外ですらも、尙且つ依然として此の調子ではないか。

「こは以ての外の挨拶である、千萬聞捨てならざる沙汰である」との意氣込でもつて、當時の彼地の技術雜誌が書き立てたものである。如何にも技術家側をして云はしめば、其處に幾多の辨駁を値する理窟があらう。第一細故（ディテール）に關する研究が獨り技術にのみ限つた事柄なるかの如くに、又は細故の訓練が直ちに非常識其のものゝ原因たるかの如くに速斷するの、先づは何たる誤解であり無禮である。今の世の中に、學者でも醫師でも、法律家でも、實業家でも、苟くも細故を處理する智能を缺いて何處に滿足なる實務を擧ぐるを得やう。如何に

も技術家は細故の探討に長ず、されど之れあるが爲に毫も其識見の高邁を妨げられざるの多きは固より何等他の職業に譲らう。況んや此の種の委員にあつては、能く細故末節をも正しく見分くる丈の才能をも併せ備ふるによつて、始めて事件の眞相を最も正確に最も適切に理解し處理し能ふのでは、ないか。否寧ろ細故末節の是非如何によつて却つて事件の全體を取捨せざる可からざる場合すらも亦多かるべきでは、ないか。空疎にして粗漫なる頭腦を振廻し、事毎に他の説明を聞き他の注意を受けて初めて模糊たる安判斷を下すと、其人自ら進むで直截に明快に事の内容を査閲し鑑別すると、知らず何れが事業其ものゝ爲めに忠實なる所以であらう。加之、今の公共事業の大部分は畢竟するに之れ技術の問題では、ないか。過去の半世紀が特に技術家の手腕に負ふの如何に大なるかを知りつゝ、然かも今濫りに之れを除外し、他により善き判斷を見出さんとするのそも何たる迂濶である。技術家に特殊の技能と經驗との存するを知りつゝ、然かもこれあるが爲めに却て之れを避くべしとするのそも何たる不合理である。況や此場合の如き、若し技術家たるが故を以て公共事業委員たるに適當ならずとすれば、然らば何が故に技術家ならざる他の凡ての階級が同時に悉く之れに適當なるのて

あるか。委員たるの資格は畢竟斯かる職業上の差別に因るべきてはなくて、只其人が果して能く其任務を遂行するに適當なるや否やを見定むれば以て足りるではない乎。

と、斯く此の一事例に就て敢て事々しく敦圉くにも及ばぬながら、然かも若し頭を廻らして、我國に於ける今の我技術家の立場に想到し來らば則ち如何、知らず我等の境涯は果して渠等よりもより多幸なるであらうか、我等は果して其努力に相應するだけの權威と勢力とを世間に認識せしめ得たであらうか、而して我等は些の不平もなく失望もなく能く技術家たり得し光榮と滿足とを各自の境遇に見出し且つはそれを樂みつゝあるのであらうか。

見よ、考ふ可き幾多の問題は却て我脚下に潜めるではないか、否現に我等自身の裡に存するではないか。

(三) 何等の皮肉

我等が不平は敢て事々しく外國の事例を惹いて云爲するまでの手數を待たじ、否一層手近く然かも一層手酷しき事例は恐らく頻々として我等の左右に繰返へされつゝあるではないか。

曰く大局に通せず、曰く事理の輕重を辨へず、曰く偏狹である、固陋である、非常識である、將た職人根性であるとの非難は此處でも現に我不幸なる技術家が、其忠實なる職務に對して社會より受取る一般の報酬たるではあるまいか。甚しきは卽ち我等の率直にして從順なるを利とし、濫りに頤使し易きの觀を持して何處迄も勝手氣儘に之れを制御し去らんと欲するではないか。曰く「技術家に調べさせやう」曰く「技師の話では斯うだ」と世間が應答しつゝある際の其の「技師」の估券に至つては恐らく出入りの職人に毛が生えた位ひの氣持ちにしか過ぎまい、然かも其以上若くは其以外の問題とあつては

尙更「技術家」なるものゝ云爲が凡そ何れ程注意さるるであらう。技術家の意見は只其窮屈なる單純なる專門中の專門の範圍にのみ限つて僅に聞く可き者、然もそれすら、多くの割引を以て受取るべき者との氣持ちが凡そ誰もの胸に蟠つては非ざるか。極端なる場合を取らば技師も機械も只等しなみに估價し利用し見縊り踏倒しつゝあることすらも敢て珍しくはあるまい。如何に我等が物々しき技術の能書を說き並べ將た深邊なるメカニックスの理屈を揑返して見せた處が、それは尙更世人の偏見に裏書きする許りではないか。

思ふに社會は職業として技術を認めては居らうが、其職業

の餘りに物質的に、餘りに機械的に、そして又餘りに理解し難く同情し難き爲めに、否それよりは寧ろ技術家自身が進んで其正當の立場を主張し說明すべく餘りに臆病なるが爲めに、却て人間として技術家を遇する所以の途を忘れたではあるまいか。「あの人は技師には珍しい」「技術家らしくは無い」などと爾く無雜作に世間が云ひ交はしつゝある其半言隻句にすらも、寧ろ我等の背に鞭たるゝ皮肉の深酷さが味はるゝではあるまいか。まさかに機械や木石の精が人間界に其姿を假現して、敢て日蔭の跳踉を得意がるではあるまいし。今更仔細げに我等技術家の人臭い態度に驚異の眼を見張つて、さも思ひがけなき事の如くにひどく感心し珍重し評判さるゝに至つては、卽ち我等が面目を遂に如何である。

但し斯く云ふとも、そは決して斯界に人なきを意味するのではない。否我等はこれを他の社會と比較するに於て、決して我に人無きを思はず又其努力の足らざるをも信ぜぬ。寧ろ左樣に多くの傑い人達を有し且つは其努力の尋常ならざるを察するによつて、尙更一般社會に對する我權威我聲望の餘りに香ばしからず餘りに重々しからざる所以を疑はざるを得ぬのである。

これを我國にしても、如今斯界の進步は其凡ての方面を擧

げて頗る旺盛であり急驟である。年々幾多の作業に建設に將た生産に、我等を中心として生み出す一般社會の福利は頗る多大である、が其顯著の功勞を以てして然かも我技術家たる御互ひが、尙甚しく物淋しく手持無沙汰に肩身狹げの面持ちなるは、さても何たる皮肉であらう。

或は斯界に名を得し先輩の誰彼を見よ、其の多數は寧ろ技術其ものより遠ざかり技術界それ自身より脫け出したる點に於て、却てより多く社會的に其手腕を伸べ其の技能を發揮し得たるの氣味はないか。其然らざるものは却て技術家たるが爲めに其の發展の自由と機會とを甚だ屢々且つは甚だ多量に妨げられたる樣子はないか。況や我等の中より往々にして傑出する偉大の人物とても、それに對する社會の歡呼は只單に其人一人を目指したものであつて、毫もその爲めに我階級の威力を加ふる所以とならざるではないか。卽ちそれが「技術家として寔に珍しい」部類の贊美たるに止まつて、敢て、斯樣な傑物を產み出す「技術界」其ものゝ眞價をも併せ畏敬し尊重せしむる所以とならざるではないか。

實に奇怪である、旣に斯許り尨大なる多衆を擁し、斯許り必須の社會的要求に起ち、而して斯許り最新智識の咀嚼と活現とに勉むる斯界が、未だ一般の眼に力ある團體として現はれ

ず、畏るべき階級として響かぬなどは、頗る不思議な現象である。が此謎語を解かんが爲めには我等は切に自ら考へねばならぬ。其仔細らしき專門的執着を離れ其分別臭き職分的我見を忘れて、虛心怛懷、徐ろに大處に大觀し高處に高觀せねばならぬ。

考ふべき時が遂に我等に來つたのである。

(四) 知られぬ巨人

近くは現代に於ける世界的事業の隨一として、其の列國經濟上に及ぼす利害關係は更なり、政治上にも社會上にも、軍事的にも技術的にも、到る所に多大の反響を喚起し甚深なる興味を以て只管注目せられつゝある、彼の巴奈馬運河の如きですらも、其處に其大工事が抑も誰が手に指揮し遂行せられつゝあるか、誰が果して此名譽ある技師長として其目覺ましき技倆を列國環視の晴れの舞臺に活躍しつゝあるかに至つては、卽ち誰あつてか之れを知らう。實は我等技術家仲間ですらが、何能くこれを喧傳せぬではないか、況や他のより廣くより緣遠き一般社會の注意をや。

工事其ものゝ困難固より名狀す可からざるに加へて、更に

炎熱あり、疫癘あり、地震あり、キユレブラ開鑿の數度の大崩壞あり。氣候と戰ひ、風土と戰ひ、天と地と物とに戰ひ、水と土と機械とに戰ひ、殊にはより我儘により放縱なる數萬の人夫を指揮統率して、倦怠なき日毎々々の工程を進め、見果ても付かざる大勞作をして着々其光榮ある成功に近づかしめんとす。況んや舞臺はこれ東西兩大洋を左右に見渡す世界的背景を後ろに、其手際の程や如何にと片唾を嚥むで見守る天下の大衆を前に、斯許り素晴らしき大活動大奮鬪の幕を勤むる當の主人公(ヒーロー)として、技師長ゲーダルス大佐(Colonel George Washington Goethals)の名は如何に世界的に畏敬し將た記念さるべきものにてあるぞ。とは云へそれすら其實際は卽ち何とである。

政治家としての何某が、軍人としての何某が、藝術家としての何某が、其他總ゆる社會の何某が、より貧しき舞臺により無雜作に立振舞ふてさへも、その一言一行が世界の果から果にまでいと賑やかに反響せらるゝ今の世に。獨り我等が仲間のみは、此無雙とも無比とも譬へん方なき目覺ましさと由々しさとを一手に收めた巨人ですらが、其の性行閱歷は更なり、其氏名にすらも、絶えて些の一般的興味と歡呼とを惹き能はぬではないか、而して其唯一つの理由は畢竟渠が技術家たるが爲めではないか。

去る三月三日の夜、米國華聖頓市に、内閣員、政治家、軍人並に各國外交團を集めた當代第一流の盛んな晩餐會が催ほされて、大統領ウヰルソン氏の手づからゲータルス大佐に贈るに地理學協會寄贈の金牌を以てし。其次の夜は紐育市のカーネギー、ホールに於て市民協會寄贈の特別名譽賞牌を氏の手に授くる爲めの大會が催ほされ。更に其次の夜は同市アスター、ホテルに於ける經濟倶樂部の集會席上、社會科學協會の記念牌が重ねて氏の胸間に輝くを見たと云ふ。即ち此の如きは以て氏の名聲が漸く其本國に汎ねからんとするを證するものであらう。無論それ位の表彰をだも贏ち得ずして何

とかせんがそれとても果して何時まで長く何處まで深く記念さるべき力であらう。やがては大統領ルーズヴエルト、タフト、若くはウヰルソン氏等の名が該運河の決行者として施工者として若くは完成者として、より花やかにより光もらしく聞こへ渡つて、型の如くに我技術家の名が夢より淡く掻消え去らぬと誰かは信ずる。

況んや彼地の技術雜誌が聲を揃えてゲータルス大佐に對し件の名譽を賛歎するの聲を聞け。曰く「凡そ技術家として斯かる光榮を享けしは寔に稀有の出來事にして、宜敢總ての技術家の共に慶賀すべき處」若くは更に進んで「由來技術家な

らざる企業者又は事務家の爲めに往々斯かる一般的名譽の與へられたる例しはあれど、茲に一偶の技術家として能く此の如くなるを得たるは、以て最も欣幸すべく、以て斯界の爲に之れを祝福せざるを得ぬ」と、斯うまで書き立てられては我等は寧ろ卒然として、したゝか我胸奥に秘めたる痛手を搔毟らるゝ皮肉な苦痛に慄かざるを得ぬではないか。

加之、此巴奈馬運河ですらも、それが政府の事業で無くて若し或一會社の經營たりしならば、知らず其技師長には果してこれと同じ程度の一般的感謝が齎らされたであらうか。現に巴奈馬運河工事と前後して、亞米利加だけにも尙幾多の之れに比すべき大工事の起れるは無きか。ホドソン河底の隧道工事、紐育市内の地下鐵道工事。ペンシルヴァニア鐵道會社の紐育、華聖頓兩驛に於ける、若くはシカゴ、エンド、ノーザーン鐵道會社のシカゴ驛に於ける終端工事の類は、何れも其技術的價値と苦心とに於て能く之れと比すべき大事業たるを云ひ能はぬであらうか、然かもその何れ一つでもが曾て左樣の成功に相當する一般的賞贊を博し得たるか、せめては其會社の株主手合からでも敢て數行の賛辭を報告書中に書き加へしむるを得たるか、但しは其技術家の名すらが果して何處まで何れ程反響せられたらうか。

(五) 諦めか、滿足か、

斯く云へば無論我技術家の凡ては一齊に色めき立つて。我等は然かく名の爲めに働く者では無い、事業其ものが我等の興味であり目的であり生命である、空虛なる聲果敢なき譽れ、それは敢て我等の顧る處のものでは無いと、斯く敦圉くことであらう。如何にも自分等とても亦屢々左樣に辯解し若くは申譯することによつて僅かに自己を慰むる場合が無いでもない。が、それは我等に取つて果して何れだけ强味ある確信であり將た何れだけ徹底し得たる意識であらう。今の活きたる世に、今の花やかなる社會に、些の野心もなく、覇氣もなく慾得もなく、功名心もなく、只專念車輪と鐵石と計算と施工との世界に自己を埋殁して以て我生を滿足すと云ふのさてもどれだけ確乎たる分別の自己に存ずればであるか。

若し能く眞に自覺し徹底した左樣の觀念が飽迄根强く其肚裏に据えられてあるならば、それこそ今日の技術家として寔に至幸の人である。若し能く實際に然か信じ然か行ふて毫も悔ゐざるだけの覺悟あらば、其人を畏敬するに於て我等は敢て遲疑する所はない。只併しながら多くの場合、それは

寧ろ態のよい一種の諦らめでは無いか、口實では無いか、捨鉢ではないか、我等は自己の經驗に徴して頗るそを恐れざるを得ぬ。が若し然らずとして、果して左樣の消極的な脱俗的見解が、必然的に凡ての技術家たるべきものゝ對境だとするならば、然らば何故に我先覺者によりて疾くにも左樣な氣高き福音が汎ねく我仲間に宣傳されないのであらう、其の尊き教訓が憐むべき後進の誰もに授けられないのであらう。即ち我等をして今頃事新らしげに斯界の無氣力を嘆ち濫りに「片隅の世界」を咀はしむるに代へて、せめては我等よりも一と際若き血に湧く今の青年技術家の爲めに、我等自ら「爾の奔放の意氣を撤せよ、爾の縱横の覇氣を去れよ。さらずば此いみじき世界に入るを許されざるべし」と力強く說破し傳道して以て渠等をより自由に進退せしめ得なかつたであらう。

我等は敢て衣食の計ばかりの爲めに斯界に志したるものではない、僅か許りの特殊の技能を頼みに拙く自己を活きんとのみ欲する積りではない。苟も「技術家」てふ最も新しき階級が十九世紀の後半に至つて初めて智識ある一階級として出現したりし以上、必らずや其處には新たなる時世の要求上、當然社會的に押しも押されもせぬ立派な立場があり、從つて又其權威を飽迄世界的に顯揚するに足るべき或力強き根柢

が横はらねばならぬと思惟したればこそ、おぼろげながらも相應の抱負を懷ぬて此天地を目指したる者ではないか。然かも若し事實に於て、それが只索莫として努力に甲斐なき片隅の世界、諦らめの世界、坊主臭い生悟りの世界に外ならぬとすれば何とである。稽へねばならぬ、問えねばならぬ、叫ばねばならぬ、徒らに默々として卑怯なる無自覺不徹底の日を送つてはならぬ濫りに唯々として姑息なる間に合せの生涯を暮らしてはならぬ。我等にはさう無雜作に自ら安んじ自ら輕んじ去るべく餘りに尊き人生があるではないか。

が、技術とは果して何であるか、技術家とは畢竟如何のものであるか。今の我行く道は果してそれで間違ひないのであるか、又はその以外に蹈むべき道は見當らぬのであるか、反省すべきものはないか、自覺すべきものはないか。我「片隅」の世界は遂に「咀はれたる片隅」に止まるのであらうか、或は進むで積極的に社會の表面に押出す術はないか。然らずんば則ち斯く孤疑し煩悶する我等の思慮の尙到り及ばざる底の醍醐味の却て斯界の何處ぞに秘められてあるか。悟るべきか諦らむべきか將た惑ふべきか。兎に角我等は考へて考へ拔かねばならぬではないか。

我等は決して諦めるのが惡いとは云はぬ、消極が惡いとも

云はぬ、それが若し眞に徹底した各自の分別の結果であれば、縱し如何の解決に逢着するとも、それは其人に取つての十分の仕合であり滿足であり得る、敢てそれを是非するのではないが、只我等は其解決に到達する所以の徑路に就て、實際何處迄徹底したかを問はねばならぬ。進んでは我技術界をして飽迄力あらしめんが爲めに、又退いては各自の境遇に眞に技術家たり得し歡喜の充溢せんが爲めに、我等は果して何處まで此點に精慮し猛省し若くは懷疑し煩悶したるかを問はねばならぬ、聞きたいものはそれである。

されば、重ねて問はん、技術とは畢竟何であるか、技術家とは抑も如何のものであるか。